

氏名	駒井 正人
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第 37 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
題目	学位論文題目 戦後日本の陶磁デザインの形成 ー美濃地域における日根野作三の活動を中心にー
	研究作品題目 作品番号 1 [土瓶] 作品番号 2 [茶器] 作品番号 3 [急須] 作品番号 4 [茶器] 作品番号 5 [茶碗]
論文審査委員	主 査 教 授 長井 千春 副 査 教 授 梅本 孝征 副 査 教 授 佐藤 直樹 外 部 柳宗理記念デザイン研究所 審査委員 元所長 森 仁史

1 学位論文の要旨

本研究は、戦後の陶磁デザインの成長、発展を支えた財団法人日本陶磁器意匠センター（以下、意匠センター）と同センターのデザイン指導にも関わった陶磁器デザイナー日根野作三の資料調査を通して、デザイン指導による戦後美濃地域における陶磁デザインの成長課程を明らかにする。これに基づく自身の作品制作を戦後デザインの遺産を継承発展させるものとし、現代の陶磁デザインに新たな視座を提示したい。

本論の構成は、第 1 章「はじめに」で、本研究の背景と目的および研究の範囲と方法について確認し、本研究の内容について述べていく。本研究で取り上げる美濃地域は日本を代表する国内最大の陶磁器産地であり、同産地の発展をデザイン指導により牽引した日根野の活動は戦後日本におけるデザインの成長に重要な役割を果たした。また、美濃焼産地の公設試験研究機関で陶磁デザインを学び、現在陶磁デザインの指導に携わる筆者にとって、美濃焼産地のデザイン的な成長は自身の陶磁デザインのルーツであり、作品制作の歴史的位置付けをおこなうためにも戦後美濃焼を中心としたデザインの成長過程の解明は必要不可欠と考え、現在残された意匠センターならびに日根野の資料調査を新たな陶磁デザイン創出の基礎となると考え研究を進めた。

第 2 章「意匠制度と日本陶磁器意匠センターの設立」では、日根野のデザイン指導を必要とした陶磁器産業の状況をその歴史から意匠センターの活動を中心に確認する。第 1 節「意匠制度と輸出陶磁器」で意匠センター設立前までの陶磁器産業の近代化と輸出陶磁器の発展について述べ、第 2 節「日本陶磁器意匠センターの設立」で戦後の陶磁器産業界で頻発した意匠の模倣問題を設立の背景にもつ意匠センターの活動から当時の陶磁器業界の状況について論述する。そして、第 3 節「日本陶磁器意匠センターの事業内容」では、意

匠センターの主要な事業である意匠登録と意匠認証による保全事業とデザイン振興事業について論述し同所の役割について述べ、第4節「デザイン指導事例」では、多様なデザイン振興事業の中からデザイナーによる指導事例を通して当時のデザイン指導の内容を紹介する。意匠センターは、意匠の保全登録と意匠認証によるデザインのチェック機関として、また多様なデザイン振興事業によりデザインの重要性を業界に広く啓蒙し、これによって陶磁産業のデザイン面での成長を支えた。

第3章「陶磁器デザイナー日根野作三」では、戦後美濃焼産地の陶磁デザインに大きな影響を及ぼした陶磁器デザイナー日根野作三について、その活動を3期に分け論述する。第1節「形成期」で誕生から学生時代、瀬戸の山茶窯時代、京都の国立陶磁器試験所時代、これら戦前の活動を陶磁器デザイナーとしての形成期と捉えその活動を確認し、第2節「実践期」でフリーランスの陶磁器デザイナーとしてデザインやデザイン指導で活躍した戦後を実践期とし美濃を中心にその活動について述べ、第3節「成熟期」でデザイン指導の集大成である著作の刊行など晩年の活動を成熟期とし論述する。そして、第4節で日根野の著作からその陶磁デザイン論について「工芸観」、「クラフトデザイン」、「茶碗と楽焼」の3つの視点から考察を加え、第5節「日根野作三のデザイン指導」で実際に直接指導を受けた陶芸家の伊藤慶二氏らへのインタビューや残された資料から日根野の人物像にも触れながらその指導内容を具体的に明らかにした。

第4章「創作研究」では、時代を経て美濃焼産地で受け継がれた日根野の陶磁デザイン論並びにデザイン指導が現在同産地で作品制作を行う自身への影響を考察し、作品制作を通して陶磁デザインに新たな視座の提示を試みた。第1節「茶器」で茶の始まりから土瓶、急須の歴史について述べ、第2節「茶器の制作」で日根野の「茶器」に関するデザイン指導を取り上げその内容を確認、日根野のデザイン指導も踏まえた筆者の創作実践による「茶器」の制作内容について論述した。そして、第3節「研究作品」で本研究の考察過程で得た知見を踏まえ、作品番号1「土瓶」、作品番号2「茶器」、作品番号3「急須」、作品番号4「茶器」、作品番号5「茶碗」についてそれぞれ述べ、作者の陶磁デザインを提示した。

第5章「資料踏査報告」では、本研究で実施した資料調査の報告を行い、第1節「資料調査報告①意匠センター資料」で意匠センターに残る戦後の陶磁デザインに関わる膨大な歴史資料の中からデザイン指導に関わる資料を、第2節「資料調査報告②日根野作三資料」で多治見市美濃焼ミュージアムに残る全容が明らかとなっていない日根野の文献資料についてそれぞれ実施した資料調査からその内容について報告する。また、調査資料についてはどちらも今後のさらなる研究の進展を目的に資料のデジタル化と基礎資料整備を実施した。

第6章「結びに」では、各章の考察結果をまとめ、意匠センターならびに日根野を中心とした陶磁デザインに関する研究、そして現代の陶磁デザインに新たな視座の提示を試みた創作研究の総括とした。

2 学位論文審査の要旨

駒井正人の「戦後日本の陶磁デザインの形成—美濃地域における日根野作三の活動を中心に—」は、戦後日本のデザイン黎明期に、陶磁デザインの確立と発展に60年以上にわたり重要な役割を果たした財団法人日本陶磁器意匠センターに集積された資料と同センターの

デザイン振興事業、啓蒙活動に関わり、日本の陶磁器産地のデザイン教育に生涯をかけて尽力した陶磁器デザイナー日根野作三の活動記録をデータベース化し、その解析を通じて陶磁デザインの成熟の軌跡を明らかにするとともに、同資料から美濃地域における自身の陶磁制作とデザイン指導の礎となった背景を史実から読み解き、その考察から得た知見を活かし、陶磁デザイン創作で陶磁デザインの新たな可能性と視座を提示することを目的としている。

【論文】

論文は6章で構成されている。第1章から第3章は陶磁デザイン史研究を中心とし、第4章は創作研究について論述している。第5章はデータベース化された資料紹介、第6章は全体の総括となっている。

序論となる第1章は研究の概要、背景と目的、範囲と方法を述べ、第2章では明治以降日本の陶磁器産業の近代化に伴う輸出陶磁器製造業の成長と発展の歴史を辿り、外国製品のデザイン模倣問題を契機に設立された日本陶磁器意匠センターが果たした陶磁器業界のデザインに関する意識改革と啓蒙活動について、同センターのデザイン振興事業、デザイン教育、意匠制度制定や意匠保全登録事業について検証している。第3章では日根野作三の美濃地域における産地指導活動に焦点を当て、製陶所や陶磁器試験場ほか研究機関、駒井正人が教員として指導する多治見市意匠研究所のルーツである「美濃焼上絵付研究所」設立への尽力などについて、日根野の記録ノートや教え子3名のインタビューを通じてその活動と同地域でのデザインの指導詳細を掘り起こし考察を加えている。また、陶磁器制作技法やデザイン論を体系的にまとめた日根野の著作『陶磁器デザイン概論』、『陶磁器の装飾技法』、『20c後半の日本陶磁器クラフトデザインの記録』は、陶磁器業界では当時先駆的な教育功績であったが、そこから日根野のデザイン思想の核となる3つの視点「工芸観」、「クラフトデザイン」、「茶碗と楽焼」を読み解き、自身の陶磁制作と関係付けながら考察を加えている。第4章の創作研究では、駒井正人の陶磁制作テーマである土瓶、急須、水差しを含む注ぐ器、「茶器」について、日根野の教え子であり、また駒井の指導教員でもあった伊藤慶二が記した日根野による1960年以降の指導記録ノートと、日根野自身が記したデザインノートから「茶器」に関する記述を選び両者を解析することで、日根野が重視した茶器フォルムの美へのこだわりと日本の煎茶文化に根ざす清澄性との関係、駒井正人が茶器制作で重視するフォルムの緊張感と茶器デザインの原点について論述している。日根野、伊藤の「茶器」に関するノートに続き、同章でまとめた駒井正人自身の注器制作ノートには、三世代にわたる日根野作三の陶磁デザイン思想が継承されており、創作者ならではの研究成果であると言える。第5章では、日本陶磁器意匠センターの資料調査で実施したデザイン振興事業資料(講演会・講習会報告書、32回分のデザインコンペティション資料、25回分の陶磁器試験研究機関作品展の資料、陶磁器意匠弘報1300号分他)をデータベース、多治見市美濃焼ミュージアムの資料調査では日根野の12000点51冊に及ぶデザイン帳を含む484件の文献資料の一覧表を作成し、意匠センターと日根野作三に関する陶磁器デザインの今後の研究進展に寄与する貴重な資料編となっている。第6章本研究の総括では、明治以降産業のために成熟していった陶磁デザインは、高度経済成長、バブル経済、日本陶磁器意匠センターの役割が終焉に向かう過程で、物質的に豊かになった現代日本の生活様

式の中でその需要と役割は変容している。陶磁器は機能的な道具としての器を超えて、陶磁素材らしい制作プロセスに根ざす表現の魅力を伝え、陶磁創作の根源的な喜びを媒介するものとして、今後は前進していくはずであると論文は締めくくられている。

【作品】

創作研究で示す茶器の作品群は、総じて駒井正人の優れたロクロ技術により極限まで削り込まれた完璧な曲面と造形が、我々に緊張感を超えた潔さと清々しさを感じさせる。

《作品番号1「土瓶」》は、本体の形状と取手のバランスが緊張感だけでなく大らかさを伝える独創的な造形である。《作品番号4「茶器」》では、共手から異素材の後付けハンドルとし、茶や湯の出し入れがスムーズな形状で、金属の硬質な印象を視覚的に取り入れ全体のフォルムに緊張感が漂っている。

《作品番号2「茶器」》は、茶器の揃いをテーマとする作品である。本来多様な道具で構成される煎茶器をあえて簡素な品目にし、生活の中で気軽に煎茶を楽しめるデザインとなっている。《作品番号3「急須」》は、横手急須と後手急須について胴の形状を課題としている。茶器形状の美について、日根野は特に胴の形態を重視していたが、この作品では丸型と筒形を基本形状とし蓋、注口、把手の印象を繊細にすることで胴の形態を際立たせ凛とした印象を与えている。《作品番号5「茶碗」》は、茶や茶器に関わる展開作品として茶碗制作に取り組んだ例である。薄い口作りにより締まった印象の白い茶碗形状に、見込みを黒で表現することで抹茶の色を引き立てるデザインである。

【口頭発表】

口頭発表では、研究要旨の説明と論文各章の解説を口述した。陶磁デザイン史研究を核とする第1章から第3章では、収集した資料画像を活かしながら陶磁器意匠センターと日根野作三が陶磁器産業や陶磁デザインの確立に果たした役割を明快に示し、第4章、第5章では創作研究へ至る制作プロセスや技法、造形について、調査研究と関連性付けながら説明された。

以上のように、駒井正人はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表等に基づき、口頭試問等により最終試験を実施した結果は以下のとおりである。

本研究は、陶磁デザインの分野で特に高度な専門性と内容を示している。日本陶磁器意匠センターで60年以上蓄積された膨大な意匠関連資料の継続保存は今日危機的な状況にある。日本から海外へ輸出された陶磁器の全意匠記録を保有する同センターは、戦後の産業陶磁器デザイン史そのものであり、それらは陶磁器産業全盛期における日本の陶磁器産地の全貌を詳細に確認しうる資料でもある。本研究は同センターによるデザイン振興事業、意匠保全、デザイン啓蒙やデザイン教育の解説を通じた歴史研究を、現代の陶磁デザイン創作に関連付けた独創的な研究である。また、本研究で進められた同センター意匠関連資料のデータベース化は、今後の陶磁デザイン史研究に多大な貢献をすることであろうことは間違いなく、同研究分野の重要な基礎資料となるはずである。さらに、昨今ようやく注目されはじめた陶磁器デザイナー日根野作三に関する研究であるが、これまで制作者の視点による資料解析と考察を試みた例は皆無であった。自身の陶磁デザイン創作の背景と意義を確認し、今後の創作のための指針を見出すことに成功した秀逸な研究である。

以上のように駒井正人は、論文と作品の成果を共に高い完成度で示し、また、口頭発表では論述と創作の関係性が確認でき、その論理的整合性を全審査員が評価することが出来た。よって、この成績は博士の基準を満たし、学位を与えるに十分であった。